

2026（令和 8）年度

小論文

10：30～12：10

教養学部

地域社会学科

一般選抜(中期日程)

注意事項

1. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 合図があったら、受験番号を解答用紙の指定欄に記入しなさい。
3. この冊子は1～7ページまであります。落丁、乱丁、印刷不鮮明、汚れの箇所を見出した場合は、すみやかに申し出なさい。
4. 解答用紙は2枚あります。1枚は清書用、もう1枚は下書き用です。提出は清書用1枚だけです。
5. 解答は必ず解答用紙の指定欄に**横書き**で書きなさい。
6. 試験終了の合図があったら、筆記用具をただちに置いてください。
7. この冊子と下書き用の解答用紙は、持ち帰ってさしつかえありません。

設問 以下の【課題文】を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、問いで指定された文字はいずれも句読点を含む字数である。

【課題文】

2020年、日本での新型コロナウイルスの感染力とその威力は、横浜に停泊中のクルーズ船内の深刻な感染状況から徐々に日本社会に伝わるようになるが、3月24日に2020年のオリンピック開催を断念するまで、同月13日には成立していた特措法に基づく対策本部も日本では設置されていなかった。4月7日に緊急事態宣言が発出されるまで、マスクの供給が間に合わず、日用品・食料品の買い占めでスーパーが大混雑するなど、市民生活は大いに混乱した。

そんななかで、当時の首相が唯一といってよい「決断」をした。それは、科学的根拠も法的根拠もないままに、他の対策に比べて2月27日という早期の段階で突然公表された、小中高の全国一斉休校の要請だった。その後も政府は「お肉券」や、減収世帯への30万給付、住民一人あたり10万円一律給付、アベノマスクの全戸配布などあれやこれやの施策を発表するが、閣議決定した後に撤回されたり、批判を受けても強行したりと混乱ぶりを見せた。そのなかでも、この全国一斉休校要請には、日本政治の特徴が顕著に表れていた。とくにこの要請には、ケア実践や生きるための条件に対する侮蔑感と、市民生活に対する無関心、そして社会的な特権者／権力者が陥りがちな傲慢さが凝縮されているからだ。以下では、この点についてももう少し詳しく考えてみたい。

しかし、振り返ってみてもつくづく考えさせられるのは、感染すれば重症化することが予測される高齢の政治家たちもいまだマスクをしておらず、多くの市民も遠くの出来事だと思っていたような段階で、なぜ小中高の全国一斉休校が要請されたのだろうかという点である。少なくともわたしの直感的な反応は、それが〈女・子ども〉に対する命令だから、というものだった。なによりも影響を受ける直接的な当事者である子どもたちは、わたしたちの社会のなかでその発言力と影響力を限りなく剥奪されている。彼女たち・かれらの生活の中心である社会活動の場を奪っても文句はいえまいというかのごとく、子どもの権利を踏みじめるかのような行為だった。子どもたちの一日の中心をなしている学校生活は、単に学びの場であるだ

けでなく、身体の鍛錬、生活習慣の獲得、他者との触れ合いや会話に満ちた、生きるために必要な睡眠や食事と同じ、生きることそのものにかかわる重要な機能を果たしている。したがって一斉休校は、学校に行かずに家で勉強、といった学びの場の移動以上の負の影響を子どもたちに与えた暴挙であったといえないだろうか。いまだに当時の休校が心身ともに子どもたちに与えた影響について、社会的に共有された理解は存在していない。

さらに、現場にかかわる教育者たちの意見も聴かれることなく決定されたという事実は、権利の行使から遠ざけられているひとにかかわる者たちもまた、その声は聴くに値しないという考えの現れである。加えて、なにより一斉休校要請にパニックに陥ったのは、社会活動の場を奪われる子どもたちを放っておくわけにはいかないと思ったひとたち、すなわち子どもの保護者たちであった。しかし、一斉休校中もっとも多くの負担を背負わされたひとたちの疲弊に、どれほど社会的な関心が寄せられていただろうか。

Who Cares? という英語表現がある。文字通り訳せば、〈誰がケアするのか?〉という疑問文だが、この表現はむしろ慣用表現として、〈自分の知ったことか!〉という反語になる。休校という案を思いついた首相、あるいは首相周辺の者たちは、休校のあいだ子どもたちがどこに行き、誰と何をするのか、少しでも考えたのだろうか。あるいは、そんなことは保護者が考えればよく、〈自分たちが考えることではない〉と高を括ったのだろうか。それとも、家では必ず保護者が待っているとでも夢想したのだろうか。

とはいえ、この一斉休校のさいには、保育園は政府の要請対象から外されていた。つまり、就学前の子ども保育・育児については、当時の政権も少しは考慮したのだろう。子の保育を必要としている保護者の労働を優先した、ということも容易に推察できる。しかし、ここでも問うてみたい。保育士に限らず保育園で働くひとたちの子どもを、誰がケアしているのか(Who Cares?)と。

もし、誰もがケアを必要としているし、じっさいにケアに頼って生きている、だからケアするひとにも当然ケアが必要だという、ケアの入れ子状態といってよい相互依存の関係を少しでも考慮すれば、保育士もまた、自らの子を育て、彼女たち・かれらが働いている間、その子が誰かにケアされていることは自明だろう。もちろん

ん、このコロナ禍のなか、もっとも重い労働と過度の緊張、そして社会的責任のなかでその職務を果たしていた医療関係者にも子どもがおり、誰かのケアに頼りながら、ケア活動をしてきたのだ。ケアするひととまた、ケアされるひとであり、なにより、自分には他人によるケアは必要ないと思えるひとほど、じっさいには他者からの気遣いや配慮、物理的な世話になってきた／なっていることに、わたしたちはもっと目を向けるべきだろう。

しかし、こうしたケアの連鎖ともいえるつながりは、ケアは女性が担うものという大前提が揺るがないかぎり、社会的に注目されない。しかし、コロナ禍で在宅勤務が増加し、これまで子育てや家事に参加していなかった者も、家で過ごすことになった。だからこそ、とくに子育て中の家庭内では、無償で、あるいはそれまで主に女性たちが担ってきたケアが露見し、以前よりもケアが注目されるようになった。とはいえ、家庭内でのケア実践を「見れども見えず」の男性が少なからずいたことが、当時の実態調査からも分かっている。

2020年4月7日の第一次緊急事態宣言直後、在宅勤務に関する詳細な調査を始めたのは、家族社会学者の落合恵美子である。彼女は、市民、とりわけ子どもを抱える母親たちの混乱、困難に対する自治体の長らの対応に、やはり深い疑問を感じ、コロナ禍が可視化させたジェンダー問題を社会問題として提起する契機となればと、在宅勤務の調査を始めている。彼女も注目したコロナ禍のなかで増大する家事・ケア負担については、2021年4月28日に内閣府男女共同参画局によって「コロナ下の女性への影響と課題に関する研究会報告書」が公表されている(以下、報告書と略記)。そこでは、21年2月までの、つまりパンデミック下の一年を、政府統計を使いつつ、経済、健康、無償ケア労働、そしてジェンダーに基づく暴力といった四つの観点から、女性が受けた影響について分析されている。

報告書には詳細な図表も付されているので、ぜひとも多くのひとに読んでいただき、パンデミック下で男女が受けるその影響の違いについて実感してほしい。自然災害やパンデミックといった無差別にひとに襲いかかる現象は、個々のひとたちが位置づけられた社会的文脈によって、その影響力を大きく変えることが一目瞭然に理解されるであろう。報告書では、DV相談件数の増大に始まり、男性よりも女性のほうが多く仕事を失い、そのなかでも非正規雇用労働における失業者が多かったことが女性の大量失業に直接つながったことが指摘されている。男女のこうした違

いは、先にも触れたように、平時の状況がパンデミックによって危機的な形であぶりだされたにすぎない、日本社会の常態が反映したものである。つまり日本型雇用の特徴として、現在女性労働者の半数以上が非正規雇用という現実があり、かつ宿泊・飲食業などパンデミックの影響によって休業を余儀なくされた職種では非正規雇用が多かったことの帰結である。

そして、女性たちの常日頃の就労状況の帰結としての就業率の大幅な低下にさらに追い打ちをかけたのが、小中高の一斉休校という政治的判断であった。落合も次のような報告書の分析に注目している。つまり、小学生以下の未子をもつ女性労働者の就業率は、子どものいない女性労働者の就業率に比べて大幅に低下しており、なかでも保育園などに通えていたであろう未就学児よりも、小学生を抱える女性たちのほうが仕事を多く失っているのだ。報告書ではこれを「休校効果」と名づけ、小学生がいる女性労働者は、働くことをあきらめ非労働力化した割合が上昇し、負の影響をより大きく受けたことを明らかにしている。

その他にも報告書は、2020年の合計自殺者数が男性の場合は減少したのに対して、女性の自殺者、とくに主婦や女子高生の自殺者増大に触れ、経済問題、DV被害、家族問題が影響していると指摘している。また、6歳未満の子どもをもつ夫婦の家事育児関連時間の国際比較のグラフも掲載されており、夫婦の合計時間では諸外国との違いがそれほどないなか、日本の特徴として、女性の育児時間が際立って長いこと、そして男性の育児時間が極めて短いことが分かる。

こうした報告書からわたしたちが学ぶのは、経済活動とケア活動とは連動しており、とくに女性にとっては、ケアの社会的分担なしには経済活動がままならないといった事実である。そう考えれば、シングル・マザーたちがパンデミックによってどのような困窮を強いられたかは容易に想像できるし、働くシングル・マザーの相対的貧困率が諸外国に比べてやはり突出して高い日本社会において、彼女たちが紡ぐケア関係をいかに良好な形で社会的に維持するかといった問題は、その家族の命にもかかわる喫緊の政治的課題となろう。

コロナ禍において子を育てる母親たちの就労環境の劇的な悪化は日本だけでなく、たとえば合衆国でも社会問題化された。

(中略)

フォーブレは、パンデミックを経験することで合衆国の政治が転換期にあることが明らかになったと語っている。つまり、彼女によれば、バイデン政権がなによりも取り組むべき課題の一つは、市場経済が潤滑に動くための基盤として、保育や介護などのケアを社会的、政治的にいかに支えるかである。じっさい、多くの女性にとって、安心して保育や介護を任せることのできる公的・社会的な諸制度の整備は、彼女たちが経済活動を行うためには不可欠である。フォーブレは次のように問いかける。合衆国の政治家たちが保育問題を無視、あるいは軽視してきたのと同じように、もし現在の社会インフラ、つまり道路網や電力網、その他の公共物に対する国家予算の執行をやめてしまえば何が起こるだろうか、と。保育を欠いた社会とは、車で通勤する労働者が、親戚、友人、近隣のひとを頼って、そのつど道路を整備し、必要なら橋をつくり、毎朝信号機を支えてもらいながら会社に行くようなものではないか、と。この多くの女性労働者にとっては自明なことをなぜ、政治家たちは無視しえてきたのだろうか。

フォーブレはフェミニスト経済学者として、市場を中心とした経済概念を転換させ、むしろ市場外の環境——これを、経済学的には外部性という——とされる、家族やコミュニティやその他の経済活動こそが多くの財やサービスを生み出していると考え。彼女が想定する経済は、市場における財の交換に限られず、より広い、人間が生きるうえで他者と相互依存したり、自分たちの心身が必要とする欲求充足のために相互行為したりすることである。市場経済とは、そうした広大な経済活動からもたらされたさまざまな資源、たとえば、労働力やひとが結ぶ信頼関係などを利用することで初めて成り立つ、大海に浮かぶ小さな島のような存在なのだ。

では、フェミニスト政治学者たちは、ケアを中心にどのような提案をしてきたのだろうか。トロント(注)は政治の第一の課題として、ケア責任の配分について、すべての者に平等な発言権が与えられ、自由に意見が表明でき、搾取や抑圧さらには暴力に晒されないような、つまり正義にかなったケアが行われるよう、法制度を整備していくことを掲げていた。フォーブレが主流の経済学における経済概念が狭すぎる^②と批判するように、トロントもまた、国会議員たちの活動に代表される大文字の政治と、日常生活のなかで行われている小文字の政治という分類をし、そもそもわたしたちの政治についての考え方が間違っているとさえ論じる。

たとえば、トロントは次のように、わたしたちに問いかける。ケア責任について、いかに社会的にみなで担っていくかを論じ決定していくことを、わたしたちが政治の第一の課題として考え始めるならば、たとえば子どもたちが通う学校の時間割の決定や、子育てや介護により時間を多く割かなければならない状況になることを考慮に入れた労働時間を設定することこそ、政治的な決定となるのではないだろうか、と。市場で多くを生産できているかに見える労働者の働きは、彼女たち・かれらがそうした労働に集中できるよう支える、その他の多くの働きや営みによって可能となっている。政治とは、こうした網の目のように広がる社会的な働きについて、^③個々の働きを注視しつつも、それらのつながりをよりよい形で維持できるように考えることである。政治をそのように捉え始めるならば、育児や介護で疲弊していたり、あるいは低賃金に喘いでいたりする人びとの生活のどれ一つとして、政治は無視することは許されないはずである。そうした事態は、社会の周辺に置かれた人びとの個別的な問題ではなく、わたしたちの社会のつながり方の間違いそのものであり、社会的不正義の問題として同じ社会に生きるわたしたち一人ひとりがその責任を免れない政治的課題である。

出典：岡野八代(2024)『ケアの倫理』岩波書店より。出題にあたって原文の一部を改変した。

*注 ジョアン・C・トロント

アメリカの政治学者。ケアの政治理論を国際的に牽引する第一人者として、「差異か平等か」といったフェミニズムが長く悩まされていた問題から、ケアとシティズンシップ、ケアと国際政治、ケアと新自由主義へと議論を展開し、以下のようにケアを定義している。

もっとも一般的な意味において、ケアは人類的な活動であり、わたしたちがこの世界で、できる限り善く生きるために、世界を維持し、継続させ、そして修復するためになす、すべての活動を含んでいる。この世界とは、わたしたちの身体、私たち自身、そして環境のことであり、生命を維持するための複雑な網の目へと、わたしたちが編みこもうとする、あらゆるものを含んでいる。(本書、p.256より)

問 1 下線部①「ケアの連鎖ともいえるつながり」とは何か、説明しなさい。(100字以内)

問 2 下線部②「フォーブレが主流の経済学における経済概念が狭すぎると批判する」とあるが、フォーブレがそのように批判するのはなぜか、説明しなさい。(100字以内)

問 3 下線部③「政治とは、こうした網の目のように広がる社会的な働きについて、個々の働きを注視しつつも、それらのつながりをよりよい形で維持できるように考えることである」とあるが、「網の目のように広がる社会的な働き」とは何か、説明しなさい。また、「それらのつながりをよりよい形で維持」するにはどのようなことが考えられるか、あなたの見聞を踏まえて論じなさい。(600字以内)